

一所懸命に、福音が語る目標を目指して

「戦時下の研究」「靖国闘争」そして地震津波原発被災地からの提言

日本基督教団仙台市民教会主任担任教師

東北ヘルプ事務局長

川上直哉

はじめに

筆者は被曝地と被災地にある神学者である。「特定秘密保護法に反対する牧師の会」が立ち上がる時、今ある現場がこの法案に直結していると直感し、運動に加わることを志した。以下、震災後の現場から見える事柄を、神学的に記す。

尚「神学的に」という言葉で、筆者は「三位一体論的に」ということを念頭に置く。その意味は、

- (1) 聖書を手掛かりとして（御子）、
- (2) 時代精神を読み解きつつ（御霊）、
- (3) 呻吟する嘆息の中に主（御父）の声を求める。

ということになる。本稿では、特に（2）を中心に述べてみたい。

1. ミケランジェロ広場のダビデ像

「特定秘密保護法に反対する牧師の会」の立ち上がる様を見ながら、私は、妻とフィレンツェを訪れたときのことを思い出した。フィレンツェの街を一望できる「ミケランジェロ広場」にあるダビデ像（それはレプリカだけれど）のことである。1504年に完成したミケランジェロのダビデ像は、これからゴリアテに立ち向かうという場面において、恐怖に怯える表情を露わにしていた。専門家によると、ミケランジェロは、その表情に、当時・当地の共和制フィレンツェそのものを写し取ったのだという。

16世紀、西欧各地で、ローマ教皇庁が、神聖ローマ帝国が、そしてフランス王国が、中央集権化を推し進めていた。そうした中で、共和制を通そうとした都市国家フィレンツェ。その姿に、ミケランジェロは、ゴリアテに立ち向かうダビデを重ねた。

現代日本において、衆参両院の過半数を押さえた自民党政権は、何をしようとしているのか。「特定秘密保護法」などなくても、別件逮捕・代用監獄・自白偏重・起訴状一本主義という隠された巨大権力装置によって、既に国家は「したいことはできる」はずである。オウム事件から陸山会事件まで、その事例は枚挙に暇がない（特定秘密、ということであ

れば、とりわけ三井環事件を想起すればよい)。しかし、今回、無理な日程をおして、この法案が可決成立された。これは何か。また、その後すぐに、首相は米国の制止を振り切って、靖国神社を参拝した。これは何か。

福島の被災地から見えることがある。それは、急激な国家の権威喪失である。今誰も、政府に期待をしていない。政府に具体的な不満すら持っていない。政府はADRを作ってもその影に隠れ、被曝被災者はただひたすらTEPCOと向き合っている。復興予算にしても、「地方分権」の名の下に、ヒモ付きではない予算を県に預け、国務大臣は陳情者に「自分に言ってもらっても困る」と真顔で語る。そうして次第に、人々は国家を忘れ始めている。これは、福島でははっきりした実感である。しかし、不満は募る。国は何もしてくれない。であれば、国に何かをさせなければならぬのではないのか。昨年末くらいから、そうした声が、頻出するようになってきた。

だから、私の推論はこうである。

国家は、グローバリズムと地方分権の流れの中で、権威を喪失しつつある（グローバリズムと国家の関係については、内田樹氏の諸論稿が説得的に思われる)。だから、為政者は不安になる（ここで不安とは、根拠の明確でない情緒的不安定、のことを指す)。それで、失われた権威を補完するべく、不必要な権力強化に邁進する。「強い国っぽい国」(宮台慎司氏の造語)を作ろうと、無理な努力を重ねる。その無理によって、せつかく隠してあった暴力装置が衆目に曝されてしまうことのリスクもコストも考えずに。

だから今、ミケランジェロのダビデ像を思い出すような気がする。遠くで、無意味な国家権力の強化が行われる。それは、きっと近い将来、主権在民などという夢を吹き飛ばすかもしれない。そういう不気味な流れを感じて、牧師たちが立ちあがった。470人を超える牧師が立ち上がった。NCC系、JEA系、ペンテコステ・カリスマ系、独立系、様々な牧師たちが、その垣根を越えて、連帯した。そこに神の促しを感じながら、しかし、そこに不安を感じながら。

2. 「戦時下の研究」と「靖国闘争」

あるいは後年、この牧師の会の立ち上がりは、1933年9月を思い起こさせるかもしれない。そう願う。つまり、ドイツ告白教会成立の故事である。

ドイツ告白教会は、私たちの国において、一つの羨望の的であった。対照的に、1930年代の私たちの国の教会は暗がりの中に置かれているように見える。しかし実際には、その実態は、イメージとは異なっているようだ。教会は現在と同様、伝道に勤しみ、現在と同様の「成果」を挙げていた(原誠「戦時下の教会の伝道-教勢と入信者」<http://p.tl/TjB9>)。そして、それと並行して、1930年代の日本にキリスト者の抵抗はあった(同志社大学人文科学研究所研究叢書『戦時下抵抗の研究』みすず書房)。私たちは画一的なイメージで過去を捉え過ぎているのかもしれない。ダビデは既にこの国でゴリアテに向かって立ちあがり

始めていた。我々はその継承者に過ぎない。だから、我々はもう一度過去を回顧してみた方が良いと思う。

特に今、「靖国闘争」を回顧すべきだと思う。1960年末に展開した運動である。キリスト教界においても、戸村政博師、宮田光男氏、五十嵐喜和師などによって、優れた実践と理論が残されている。ここに学ぶところは大きい。紙幅の都合上、その要点を簡単に述べる。第一に、この運動は大戦下のキリスト教への痛切な反省に基づいている。そして第二に、この運動は現在まで続いている。そして第三に、この運動は一つの限界も示している。それは「闘争と戦い」の言葉遣いに起因する限界である。

3. 提言

ここで、靖国闘争を起点として1930年代を回顧し更に被災地から語り得る提言を、記してみたい。100年単位で立ちあがろうとする私たち日本の教会の枝としての自分自身に、メールを送るためである。

(1) 過去を自分で捉えかえすこと

私たちは、あまりにも紋切型で画一的で通俗的な「過去」の像に囚われているように思う。今、全国の図書館は書籍を融通し合うようになり、多くの資料はネット上で閲覧可能となった。大学等での研究は進展し、新しい過去の姿はいよいよ鮮明になっている。たとえば、日本基督教団の戦責告白等において「見張りの務め」の不十分さが指摘されてきたが、今分かってきたことは、その「務め」の不十分さだけでなく、その「務め」に就いていると自覚していた人々が翼賛体制を鼓舞したという事実がある（筆者はP・T・フォーサイスの日本における受容から、このことを学んだ）。革新的な人々が扉を開き、保守的な人々が大挙してそのあとに従った。

先達の何が間違いであったのか、そして、我々は何を継承しなければならないのか。それを、いつも新しく、学び直さなければならないと思う。靖国闘争の際、それは真剣に行われた。資料的な面では今よりもはるかに貧弱な中で、それは行われた（林嗣夫他『教会の戦いとしての靖国闘争』改革社、137頁以下、等）。我々がそれを行わないのは、端的に怠慢であろう。

今は備えの時であると思う。まだしばらく「集団的自衛権容認」の確保を通して現行憲法の形骸化を目指すのが、今の国家の動静である。つまり、国家はしばらくの間、新しい活動（暴虐）のための準備に専心しているのだ。勿論その準備活動への抵抗は、力強くなされていだろう。そしてそれと共に、我々は備えなければならない。現行日本国憲法が有名無実化される可能性は、かつてない程高まったのである。最悪の事態に対応できるだけの準備をしなければならない。その危機感が、今回の「牧師の会」の発足を促したのではないか。準備とは何か。それはまず何より、歴史に学ぶことである。我々は為政者に、言い飽きる程に「歴史に学べ」と言い募るのだから！

(2) 2・11への参加

靖国闘争の優れた点は、その持続性にある。実に今でも、その遺産は生きている。「2・11」集会は、今も行われているはずだ。そこに参加すること。そして、良い点も悪い点も、そこから学ぶこと。それが重要だと思う。

震災に対して、普段からどんな備えが必要かと、しばしば問われる。私は、ご自分の足元にある遺産を見直すよう、いつも勧める。助けはどこか遠くからは来ない。ただ、自分の足元には、助けになる何かがあるはずだ。教会は、キリストの体として、死んでいないはずなのだから。

(3) 公共性獲得のために

靖国闘争は、全日本仏教会や新日本宗教連盟などと共に進められ、「靖国神社問題連絡会議」を構成するに至った。なぜか。運動が公共性を担保するために、どうしても必須のものとして、連帯が求められたからである。ただし、その連帯は、多くの努力にもかかわらず、なお模索の中に留まったように見える。未だ第二バチカン公会議やJ・ヒックの試行錯誤も十分に人口に膾炙していたわけでもない時期なのだから、それは無理もない。しかし、今私たちは、その試行錯誤を批判的に議論した後の時代を生きている。

被災地では、連帯こそ、全ての活動における鍵であったと言える。実に我々が被災地で確認した事柄が、既に1970年にいくつも先取りされている(戸村政博『靖国闘争』新教出版社、42頁以下・96頁以下、等)。それを学びつつ、さらに我々は、教会間の連帯・教団間の連帯・諸宗教間の連帯・諸国家間の連帯を模索し続けよう。そのために、21世紀に至る教会の世界的動き(試行錯誤)に学ぼう。その時、「福音派」「エキュメニカル」といった語にまわりつく偏見と先入観を乗り越えようとする運動が、この50年間で確かに前進していることを知るだろう。例えば昨年(WCC釜山総会)における世界福音同盟の公式声明は、そうした運動の具体的表れであった(詳しくは東北ヘルプのホームページをご覧ください)。

実は、連帯という課題を前にすると、靖国闘争の限界もまた、見えてくる。当時、未だ革命への憧れが一世を風靡していた頃、平和を求めるキリスト者の言葉もまた、闘争と戦いへと惹き込まれていた。筆者はここに一つの限界を感じる。

当事者は、いつも闘争するかもしれない。しかしキリスト者が証する愛は「全ての罪を覆う」と信じる筆者は、次のように呼びかけたい。先達の限界を乗り越えるために、今キリスト者は、剣を鋤に変える神の業を証し、せめて自らが使う言葉を、戦いの言葉から和解の言葉に変えよう、と。

反対運動において、どんな言葉を選択し、使うか。そこで、人々はその運動の包括性を判断する。そして包括的でない運動に、人々は公共性を認められない。公共性を認められなければ、(主観的・個人的な次元は別にして)どんな運動も孤立し失敗に終わる(それは

原水爆禁止運動の反省として、靖国闘争において確認されていた)。つまり、どんな言葉を選び使うかに、私たちの運動の成否もかかっているように思う。

結びに

昨日、会津で献身する牧師と交わした会話を思い出す。支援であれ反対運動であれ、そこに意味を見出すにはどうすればよいのか。その鍵は、「現場と自分」そして「目標と福音」の間の接続にあると思う。

現場にだけ、可能性がある。あらゆる抽象的な「正義」は、逸脱と分裂と暴力を生み出す源となり得る危険なものでもある。ただ、「不正義への否」だけが、我々に取扱い可能な「正義」である。そのことを、私はWCCでの議論から学んだ。「現場」には、不正義がある。それへの否は、安全な正義だ。現場から離れては、危険だ。「現場と自分」の接続は、全ての始点となる。

現場を持ったなら、目標を獲得しなければならない。現場にはいつも風が吹く。聖霊の風だ。それはどこに吹くか、わからない。それで私たちは道を見失う。迷子になる。意味を見失う。しかし、目標があれば大丈夫だ。右に行っても、左に行っても、軌道修正ができる。回り道の中に、大切な神様からの賜物が隠されていたりもする。目標さえあれば、現場で迷うことは無い。

但し大切なことは、目標が福音と繋がっているかどうかである。もしその繋がりが見いだせれば、キリスト者としてやっていける。大戦中は「大東亜協栄」が目標となり、キリスト者は皆（保守・革新を問わず）躓いた。靖国闘争においては「信教の自由」が目標となり、その福音とのつながりが各方面で議論された。二つを分けたのは、おそらく、福音との接続への自覚的な反省の深度である。今回はどうか。

大切なことは、目標を定めた上で、その目標が福音とどう繋がっているかを批判的に考察し抜くことである。「目標と福音」の接続は、全ての導きの星となる。

結局、「一所懸命」になること（宮田光雄氏のことば）だろう。現場の「一所」に踏みとどまり、「懸命」に目標を目指すこと。それが、活動に意味を与えることなのだと思う。

「一所懸命」という結論は、私たちに教会を想起させる。現場と目標の間で、私たちはきっと教会を見出す。福音を目指し、福音を仰ぎ、福音に生きる共同体。その形成に資する運動が、「特定秘密保護法に反対する牧師の会」の運動であればと、強くそう願って、ここに筆をおく。

(2014年1月17日)